

氏名(本籍) ^い李 ^ほ鎬 ^{そん}墻 (韓国)

学位の種類 文学博士

学位記番号 博乙第441号

学位授与年月日 昭和63年3月25日

学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当

審査研究科 歴史・人類学研究科

学位論文題目 「三・一運動」における独立言論の研究

主査 筑波大学教授 芳賀 登

副査 筑波大学教授 岩崎 宏之

副査 筑波大学教授 文学博士 大濱 徹也

副査 筑波大学助教授 文学博士 池田 元

副査 筑波大学教授 文学博士 宮田 登

副査 筑波大学助教授 朴 聖雨

論文の要旨

本論文は「三・一運動」における独立言論に関する本格的・基礎的研究である。この分野の研究は事例紹介にしても十分でなく、かつ独立言論の範囲と影響、組織等を含む全貌を明らかにするための系統的研究、戸籍化が十分でなかった。その多くの理由は独立言論の範囲はもちろんのこと、地下活動によるところが多く、非合法的運動であったため、史料残存が不十分であったこと、その上に日本の朝鮮総督府の弾圧対象でもあったこと、その結果「不隠文書」「不法刊行物」となり蒐集困難におちいったことによっている。

しかし本論文は参考の多年のジャーナリストとしての経験と日本での研究を含めた史料の博搜によってマスコミュニケーション等を根にもつ研究となったことに長所がある。

しかも本研究は、(1)史料整備による独立言論の戸籍化、(2)独立言論の内容と様式の検討、その上での類型化と分類、(3)独立言論の歴史的推移—とくに海外僑民の活動を中心に—において活動の具体的分析につとめている。その中で一番大変であったのは地下新聞の発掘である。

しかしそれを可能な限り、年表的整理を試みたことは大きな意味もっている。

本論文は冒頭に、三・一運動前の抗日活動概観の表をかかげ(表1)、三・一運動の独立団体の概観(表2)をはじめ、以下本文に、三・一運動前の海外言論一覧、独立言論発行日誌(1919年3月1日～年末)などを作成して基礎的な仕事をおこない、かつ独立言論の雑誌、ビラ、檄文その他

の紹介をおこなっている。その上に立って第一章独立言論と「三・一運動」、第二章「海外僑民の憂國言論」、第三章「独立言論の激発と闘争」、第四章「独立言論の類型と特徴」、結論より構成されている。

その第一章では、独立言論に独自の資料を加え、独立言論とは、1919年3月1日の独立宣言と共に出現したもので、独立運動に関する言論活動の総称を示すもので、年末まで10カ月にかかわるものとしている。しかしこれは1910年8月29日朝鮮総督府成立によって、韓日合併以来、三・一運動直前までのものを含むものであり、その中に韓国人の手による初期のものとして朝鮮独立新聞をはじめ、種々のものが含まれ、「東亜日報」のごとき民族紙にかかわるものである。

独立言論と万才示威道別運動状況からはじめて三・一独立宣言の背景の叙述、書堂活動や、三・一運動のひき金となった留学生の二・八運動とのかかわり、韓国基督教の隆盛と民族主義とのかかわり、東学革命と天道教の抗日運動にふれ、その上で「三・一精神の形成」過程にふれ、それが何故平和と非暴力の人道主義と無抵抗主義となったのかを叙述している。

第二章海外僑民の憂國言論では独立言論の培養地帯として、(1)中国東北地方の義兵流民、(2)上海地方の亡命之士、(3)露領地方の自立僑民、(4)ハワイ等アメリカ僑民、(5)日本留学生の意気としての朝鮮基督青年会・学友会・朝鮮学会・朝鮮女子親睦会・京都朝鮮留学生親睦会・在坂朝鮮人親睦会等にふれ、その上で抗日新聞の全国侵透として、(1)アメリカ僑民の言論、(2)沿海州ウラジオストックの新韓村と露領僑民、(3)日本の留学生の言論抵抗、(4)その他の地域として青島、間島地方、中国遠東地方、上海地方、韓国本土の運動にふれている。

第三章独立言論の激発と闘争では、(1)「朝鮮独立新聞」の断絶なき執念の続刊への努力と独立言論への誘発剤となったことの意義、地下配布網の存在の実例をもつての紹介、ついで(2)国内外の独立言論を国内の地下新聞と抵抗の具体的新聞毎の紹介と解説が加えられている。(3)宣言書、要望書、ピラ、檄文を具体的に紹介している。その中には、三・一独立宣言書はもちろんのこと、独立宣言を布告文、朝鮮独立宣言書等多数が具体例をもつて紹介されている。また長谷川総督への通告文、ウィルソン大統領への陳情書、日本国総理大臣への建白書等の陳情、要望、趣旨書類があつめられている。その上で、ピラ、抵抗等檄文類が紹介されている。

第四章独立言論の類型と特徴では、内容の分析でみる四つの類型把握として、(1)激情型の独立言論による極限闘争。(2)自立・独立・示威負担を脅迫と資金提供を強制する警告型独立言論、(3)平和的示威などを通じて講和等を訴える外交型独立言論、(4)武闘型独立言論に分けて事実を紹介している。これは、三・一独立運動後一年の経過へ対応させている。ついで発行の経緯にみる特徴として、三・一運動以前までは大部分間島地方を中心とする中国東北地方とウラジオに中心があったことを、国内的にはソウル中心であり、ついで平安南北道であること、中国東北の独立言論もソウルのものも同じ傾向を示し、露領中心のものはウラジオ中心とくに新韓人村を中心になっていること、間島地方のものは武闘型をとっていること。

発行主体の競争的活動がみられること、独立宣告書の通送系譜も推定できること、そのためにいかなる組織が動いたか、天道教関係の果たした機能や基督教団体の機能等にふれている。これと共に

学生達の団体の動きとのかかわり等にふれている。

最後に独立言論の貢献度点検において、(1)独立言論の逆機能の批判をとりあげ、過大宣伝、煽動的言論の動きの批判、海外情報の過大視の批判を通じて事実認識を明確にすることによって、独立言論としての機能を果している。しかしその反面活動も多く事実をかけはなれた面のもつ逆機能を指摘し、脅威をもって反理性的な動きをとり、暴動化をすすめる一契機の中にマスメディア史としてユニークさが加わっている。(2)新資料で発掘したもので多いのは湖南地域のものが多い。その多くの資料は学校や祖先の愛国運動や裏付け資料の中に見出される。

審 査 の 要 旨

本論文の価値は、三・一運動における独立言論の役割を示す史料の紹介・分類・運動主体の分布とその解説にある。しかも非合法の地下出版物を史料として駆使して、史的段階区分をしたことは、韓国独立運動史において一定の評価をうけることができるし、その間において蒐集した史料の中には韓国学界においても未見のものも紹介も少くない。

その点からしても韓日両国における史料捜査は、今後における韓国現代史史料発見に有効と考える。本研究は韓国近代ジャーナリズム史の上で新聞のみでなく、不穩文書、ピラ、貼札、檄文等のごとき雑資料を駆使した点において画期的であり、しかもソヴェート、中国東北部から上海その他の活動をフォローしている点、その運動の広汎な型での動きをよく調査している。加えて韓日両国での出版資料や研究成果を利用し、かつ文献一覧を作成している点、評価にあたいする。既に紹介した表は、自分で作成した基礎文献であり、利用価値があるものでもある。

本書に民族叙事詩的部分があるのと科学的分析より以上に精神史的把握の部分も少くない。これは韓国独立運動史が政治史中心で、また基礎的研究成果として今後にまっところが多い。そうした現状では、多角的な把握が必要である。うわさや流言蜚語のごときや、民俗的把握が不十分である。ハングル面の分析等を通じて新聞の性格づけ等、今後検討すべきものが大きい。

さらに、ジャーナリズム史として鳥瞰図づくりのための理論モデル分析等までつきつめる努力がかさねられる必要がある。

独立言論の中に、国家なき国家主義論を見出すことができれば、独立言論が民族独立運動の推進の体制を果していることを証明できるならば、本論文の価値をいっそう高めると考える。筆者は三・一運動の見取図等充分構想の中に位置づけているが、これをより妥当なものとするためには、1910年8月の朝鮮総督府独立以来の独立運動下の言論活動への弾圧史とのかかわりの中で、よりナショナリズムとデモクラシーの結合、インテリ指導と農民との結合を媒介とした新しい思想や生活要求を具体化し、中間層の把握が必要ではなからうか、ともあれ本論文は独立言論の基礎的研究として価値ある業績である。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。